

# 随想

## 出身地

清水 慶太郎

おたくのご出身は「昨年十一月、福岡から転動して来て、この言葉に悩まされ続けている。悩まされるというのは私の場合八は、熊本です。Vという具合にはいかなないのである。

私はこのとき八出身とはなんですかVと聞きかえすことにしている。話の腰を折られ、鼻白んだ相手は私の顔をのぞく。別に意地悪をしているのではない。初対面の人と話すときには格好の話題だと思っただけ、簡単には答えられない。出身。広辞苑の説明は生れた土地、卒業した学校、経過してきた身分などが、そこであること。学校と身分を除くと、どうやら出生地のことらしい。すると、私のように台湾で生れたものは台湾出身で、父親が米国の駐在員をしているときに生れた子は米國出身、ということだろうか。長女は熊本出身で、次女は大阪出

身ということだ。サラーマンの家庭では起りかねない。では、出身と本籍地とは同じものだろうか。選挙が近づくと、南苑候補者の略歴を調べる。このときに候補者が答える出身地は、ほとんどが本籍地である。かつて、福岡県知事だった人が選挙のときに聞かせてくれた話である。この人、もともと長崎県に本籍があった。役人として福岡県庁に入り、退官して立候補するときに本籍を福岡に移し、福岡県人になりすまして二期知事をつとめた。本籍とは「戸籍の所在地。生活の事実を基礎とする住所と異なり、単に届け出によって形式的に定まる(新世紀大辞典)」。知事さんのやったことも違法ではない。

熊本出身といえ、まず頭に浮かぶのはモッコスばい、ということである。モッコス気質というのは、たまたま熊本で生れた人や、本籍はあるが住んだことはないうといった人に持合わせがあるだろうか。むずかしいといえば、人格形成過程になんらかの形で熊本が影響し、モッコスが受継がねば、特有の熊本人は出てこないし、熊本出身ともいえないだろう。本籍は金沢にあるが、二、三度墓参りに行っただけで、そこで生活したこともなければ、金沢についての知識は旅行のガイドブックほども持っていない私自身を金沢出身とはとても呼べない。どうもやっかいな質問だ。

考えてみた。「それは無い。しかしその周囲のみ在る。」という絵―そのうちに、窓枠だけが在ってその途中がポツンととぎれ、切れた形をたどって行くと人型(ひとがた)を感じさせる空間があるという荒川修作の作品に出会った。清冽な虚無を感じた。

画面に赤い馬の数が殖えて行く。解答が返って来ない問いを自らに発しながら。「どうして馬でなくてはならないのか―それは馬ではなく馬を錯覚させるしみみたくないものではないか。」  
「赤でなくてはならぬ必然があるのか―赤い色がねを掛けて見ることにしたら。」ETC. そしてなお描き続ける。描き続けるよりほかはないようである。

ずっと持ち上がって来た中学三年生である。西洋十九世紀以降の美術の動向を眺めた後、入学以来身につけた描画表現力の総決算的な作品を描いている。「私」あるいは「私の周辺」からテーマをとり上げることを条件にしてあとはずべて自由。「自由が「一番困る」と途方にくれるしほの間があったが、今はそれぞれに完成に向かいつつある。自然派あり、印象派あり、超現実派あり、抽象派あり……という状態であるが、懸命に描いている生徒達と、この時間くらい自由

## 断想

野口 みさを

産業活動が活発になり、交通網が発達すると、人間の生活圏も広がって、いままでの県とか市とかいう行政区画では区分できなくなる。私の長女は福島で生れ、三年間は福島、沖繩二年、また福岡で二年、熊本もやがて一年になる。このコスモポリタンの、無故郷児はこんどは、どこへ行こうかなと早くもおやじの次の転動を心待ちにしている。  
熊本の宴席でソーラン節が飛出し、みやげ品店には全国の名産が並ぶ時代である。人間性の特徴が薄れ、均一化して行くのも当然の成行きかもしれない。  
(朝日新聞熊本支局長)

時間と金がないので、それらを目の当りに見ることはほとんど出来ない。それで私の前には美術雑誌が新しい流れを運んで来る。ポップ・オップ以来、曰くキネティックアート、ライトアート、コンピュータアート、ミニマルアート、エアアート、ハプニング、テクノロジー論争など、とうとうたるその流れは到底無視出来ないものである。そのはるか彼方、アポロ十一号は月に届いた、その視点(距離的、内容的)からの美意識はもっともと変革を要求され、美術界もそれをとり巻く諸情勢も更にめまぐるしく動くことになるだろう。

自己発見、自己主張、自己拡張が出来る時は外にあるだろうか話し合い、更にひとりひとりが自分を懸命に出し切った作品の評価の基準は何だろうかと思ふのである。(画家)

## ヒバリとともに

吉倉 真

高平に家を建てて移ってきたのは晩春の候、空気がきれい、新緑を吹き通してくる風はさわやかであった。何よりもうれしかったのはヒバリのさえずりである。五月になると夜明けが早くなって、五時頃にはもう空が白んでくる。あたり一帯が花畑なのだが、その頃からヒバリがせせせとさえずりだすのである。ヒバリのさえずりを聞いてみると、いかにも春らしくてのんびりするが、ヒバリにとっては実はなわばりの宣言なので、他のヒバリにとって自分のなわばりへ入ってこようものなら、猛烈な勢で追払ってしまふ。舞いあがりながら鳴くの「のほり」、空中で翼をふるわせながら鳴くの「舞なき」「空なき」、降りながら鳴くの「くだり」といっているが、さえずりはそれぞれが違って、目をつぶっていてもいまヒバリがどうしているのかがすぐわかる。

六月八日、菊池水源の探鳥会から帰ると、家内がお隣の畑の中にヒバリの巣があると

半面、それらマスコミは現在まで美術史の主流からはみ出していた異色の作家の錬金術師的な技術や狂気の沙汰や魔的な雰囲気躍起になって掘りおこし再評価したりしている。いわゆる美術的な世界が総なめに出し尽くされつつある状態ではないだろうか。それを末期症状という人もあるし、転生の期と考える人もいる。それが末期になるか転生とするかは、独り美術界だけの問題ではなく、やがてとり上げるのは、やっぱり油絵具である。

友達からもらった洋蘭の花束が高雅な姿で机上に匂った。矢も楯もたまらず小さいキャンパスをひろげて首つびきで写しとっていく私の脳裡を「物はそこに在るということに無二の価値があるのであって、それを認めたということ人間の側を通じた表現に移すことはその根元的存在を損うだけであり、その歪曲に過ぎない」という意味の言葉がよぎるのである。  
「在る」ということは描けないかしらと

あると言って連れていってくれた。巣はグラジオラスの根もとにあって、五羽の雛が果いっぱいうずくまっていた。まだ目を開くのがもううげで、時々黄色い嘴(くちばし)をあける。淡い麦わら色の長い初毛が生えている。こんなところに巣があつてよいものだろうか。といって他に移すわけにもいまい。ままよ無事に育ってくれよとその場をはなれた。

次の日の朝、家のまわりを野犬が一匹うろついていた。あの巣をみつけないればよいが、野犬を遠くに追払って、急いで巣をみに行った。巣には昨日と同じように元気なヒナがいた。

次の日は娘がみに行ってきた。皆元気でいることを告げた。しかしどうも野犬のことが気になって仕様がな。いつぞやの鳥獣審議会の席上で野犬のことが問題になったことがある。野犬が近頃ふえてきて、キジの巣が荒されて困るというのである。とにかく野犬をなんとかしなければ、キジ、ヤマドリ、コジュケイなど、地上に巣を作る鳥がだんだん減ってきはないかと心配である。

巣をみてから四日目、帰宅したら家内が待っていたように、もう巣にヒバリがいないという。それから近所のおばさんが、畑でヒバリのヒナのようなものをみかけた。それではもう巣立ったのか、と安心しよう、また何か大切なものをなくしたような妙な気分になった。ヒバリのヒナは十一、二日で孵化し、九、

十日で巣立つというから、考えてみればちょうど巣立つ頃ではある。  
六月のなかばを過ぎると、あれほどさえずっていたヒバリの姿がみえなくなつた。一体どこへ行ったのだろうか。夏は林地に移って、そこで地味な生活をするという人もあるが、是非確かめたい。秋になるとヒバリはまた畑にみられるようになり、この頃には若鳥もいて空高くのぼってさえずるのである。繁殖期が終わってからのさえずりはいわゆる浮かれ歌で、サクラの花が小春日和に返り咲きをするように、秋の日の快適な気温、とくに光の強さが春と同じくらいなものだから、それに促されてさえずるのである。冬はどこにいたのかはつきりみたくとはないが、少しのびた麦の間とか川原の枯草の間などにだまって生活していることである。ヒバリは熊本県の県鳥になつていて、よく人に親しまれている鳥だが、生態の細かいところになると、まだわかっていないことが多いようである。

ヒバリのさえずりは聞かなくなつたが、毎朝コジュケイの「チョットコイ、チョットコイ」という鳴き声を聞きながら。天気のよい日にはホオジロも鳴く。秋にはどんな鳥がくるだろうか。それにしてもわが家にもっと立木がなければと思っている。  
(熊本野鳥の会会長)